

## 近世後期庄内藩預地の郷宿

本間 勝喜

### はじめに

江戸時代中期以降、大名の城下町や幕府代官役所の所在地には、一般に郷宿という宿泊施設が置かれていた。藩の諸役所や代官役所に御用があつて出かけてきた時などに村役人や農民が宿泊する定宿のことである。森鷗外も歴史小説『洪江抽斎』の中で、浜松藩のことを念頭に、「郷宿とは藩政時代に訴訟などのために村民が城下に出た時舍る家を謂ふ」と述べている。

ところで、郷宿は単に村役人などの定宿やそれに関連する業務に従事したばかりでなく、支配役所の下請的な機能を果たすところのいわゆる「中間支配」的な仕事を行う場合も多かったのである。

しかし、郷宿に関する研究はあまり多くないのであり、幕領の場合、管見では信州中野代官所など二、三の事例を除けば、<sup>[1]</sup> まったく研究はされていないとみられる。

庄内の場合も、城下鶴ヶ岡をはじめ酒田、大山などに郷宿が置かれたが、<sup>[2]</sup> 本格的な研究はまったく行われていないといえる。

そこで、本稿では、庄内・由利幕領の郷宿について、庄内藩の預地となった明和六年（一七六九）以降城下鶴ヶ岡に置かれた郷宿に限定して、その役割を中心に検討したものである。

## 一、城下鶴ヶ岡における預地の郷宿

### （一）七日町・柏倉久右衛門

正徳三年（一七一三）に余目領（五千石、十五カ村）の預地支配を免じられた庄内藩に対し、享保十四年（一七二九）に越後国浦原・岩船両郡にある幕領を預地支配することを命じられた。そのために預地役所である原海役所が越後・出羽国境に近い原海村（現温海町）に設置された。その際、原海村のうちに郷宿も新設されたものと推測される。

ところが、寛保二年（一七四二）に越後預地の一部が私領渡しとなって、その代わりに庄内幕領のうち丸岡領（一万石、三十四カ村）・余目領など一万五六〇〇石余が庄内藩の預地とされたので、それを機に預地役所は原海村から城下鶴ヶ岡に移転された。鶴ヶ岡を貫流する内川の川端に位置したので通称川端役所と呼ばれた。

当然ながら、郷宿も鶴ヶ岡に改めて設置されたのであり、「余目御料根元記」<sup>3)</sup>にも、同年のこととして、

百姓宿 柏倉久右衛門

とあり、鶴ヶ岡七日町住居の町人柏倉久右衛門に預地の百姓宿（郷宿）が命じられたのである。寛延二年（一七四九）に大山領（一万石、二十三カ村）の大部分と由利領（二千石余、十一カ村）も預地に加えられたが、その時点での預地役人の名前を挙げた中に、<sup>4)</sup>

## 取次名主宿 鶴岡七日町柏倉久右衛門

とあり、引続き柏倉久右衛門が預地郷宿を勤めていて、今度は庄内・由利幕領八十三カ村全体の郷宿となったわけである。ただ、越後幕領も預地であったので、同人だけでなく、外にも預地郷宿があったことであろうが明らかでない。なお、庄内・由利幕領では、郷宿のことを多く名主宿と称したが、時には百姓宿とか郷中宿とも称することがあった。しかし、寛延二年中に預地が返上されたので、鶴ヶ岡における預地郷宿も一旦廃されたのである。

代って、幕府代官の支配となり、大山村（現鶴岡市）に代官役所として出張陣屋などが置かれて、庄内・由利幕領を管轄下に置いたのであり、そのため同村のうちに郷宿が置かれたのである。<sup>(5)</sup>

さて、明和六年（一七六九）四月、庄内・由利幕領が再び庄内藩の預地になったのであり、預地役所として川端役所が再置されたし、鶴ヶ岡に預地の郷宿も再設されたのであるが、

一、柏倉久右衛門御預地諸役人・百姓等之定宿被仰付候<sup>(6)</sup>

と記されているように、今度も七日町柏倉久右衛門が預地郷宿を命じられたのである。

同年九月二十五日に城下町鶴ヶ岡の川端役所に御用で出向いた由利郡大砂川村名主の文左衛門も「鶴岡宿柏倉久右衛門方江宿仕候」と郷宿に数日宿泊していた。<sup>(7)</sup>

柏倉久右衛門は鶴ヶ岡七日町に住居する富裕な造酒屋であった。<sup>(8)</sup>確かに、庄内藩が元禄元年（一六八八）に鶴ヶ岡町々の富裕な町人に御用金を課した際にも七日町柏倉久右衛門の名前がみられる。<sup>(9)</sup>十八世紀後半頃に七日町肝煎を勤めていて、町大庄屋宇治家の「御町例帳」<sup>(10)</sup>等に柏倉の名前がしばしば出てくるところである。同家は七日町を代表する町人であった。

城下鶴ヶ岡のうち七日町は旅籠が多く、宿駅の機能を担っており、伝馬町であったと見られる。貞享二年（一六八五）七月に大火があり、七日町などの類焼した家に救助米が下賜されたが、<sup>(11)</sup>

一、同(米)三俵 耆軒屋敷、問屋仕候付、同町久右衛門

とあり、柏倉久右衛門は当時問屋であつたことが知られる。問屋は五街道をはじめ諸街道で、「宿駅の公私旅行者に対し、人馬伝送・宿泊等の駅務を総理するの役人」であつた。<sup>(12)</sup>つまり、柏倉家は当時鶴ヶ岡の宿駅的機能を有する七日町で伝馬制の差配役であつたのである。いわば人馬の調達の責任者ということである。同家はその後引続き問屋を勤めていたとみられるのであり、例えば、文政八年(一八二五)正月に、預地役所より大山村の惣代名主あてに次のように通知されていることからも窺える。<sup>(13)</sup>

柏倉久右衛門儀、今度河上四郎右衛門代り 御町方検断役被仰付候、此段為承知申達候

町方検断役が、町大庄屋河上四郎右衛門の兼務を解き柏倉久右衛門に交代したのである。検断役は町役人の筆頭を指す場合もあるが、<sup>(14)</sup>鶴ヶ岡では宿駅や伝馬制を統轄する役目であつたと思われる。

それよりかなり以前、鶴ヶ岡大庄屋宇治家の「町奉行所例帳」に、安永三年(一七七四)四月のこととして、<sup>(15)</sup>  
一、柏倉久右衛門儀、御預地御用達候様可申渡旨、弓之助殿より御紙面を以被仰達：

と、庄内藩中老杉山弓之助より久右衛門を預地御用達に任ずることが申渡されたのである。そして、翌安永四年正月に、預地御用出精と言うことを理由に久右衛門に三人扶持を与えられることが家老松平平右衛門より申渡された。<sup>(16)</sup>庄内藩の御用達は「藩の財政的御用を達し、扶持を給されていた」<sup>(17)</sup>ことから、預地御用達も財政的な御用を勤めたはずであるが、特に年々数千両にのぼる年貢金の徴収と一時保管を主として行つていたものと思われる。なお、このような扶持米は「御預地御口米より被下候」<sup>(18)</sup>というように、庄内藩に預地支配の経費の分として与えられている三升口米のうちから支給される場合もあつた。三升口米は預地村々より年貢米一石につき口米三升の割合で取立られるものである。

因に、文政八年(一八二五)五月の「鶴岡七日町戸籍人別帳」<sup>(19)</sup>には、

長人五人組頭

御預地御用達并検断役

当酉五十四歳

一、式軒役 酒造家業 柏倉久右衛門 ㊦

と記されており、当時柏倉家は二軒役という広い家屋敷を構え、引続き酒造業を行っていた。七日町の長人役に就いており、すでに預地郷宿は辞していたものの、預地御用達と検断役を勤めていたのである。

さて、明和六年（一七六九）より預地郷宿を勤めていた柏倉久右衛門家であったが、三十五年ほどした文化元年（一八〇四）十一月になって、預地郷宿の役を罷免されたのである。<sup>20</sup> 預地役所の布達では、すでに寛政十二年（一八〇〇）頃、郷宿柏倉久右衛門の勤め方が宜しくないといった風説があつたようである。当時庄内藩は寛政改革の一環として預地村々に対して郡中入用・村入用などを削減することを命じていたのであり、「近年町宿賄代高直二相成候<sup>21</sup>」というように郷宿での出費が問題とされたことと関連していよう。預地の領民たちの中には、久右衛門の取扱いに不満を抱く者もあつたようであり、預地主役白井惣六方の門に罷免を求めるなどの張札がされたりもしたようである。<sup>22</sup>

柏倉家は文化元年に預地郷宿は辞したものの、その後も七日町の町役人や預地御用達を勤めたし、文政八年（一八二五）に新たに町方検断役に任じられたことから考え、預地郷宿を罷免されたのは不正などによるものではなく、宿泊料の件を含め郷宿の運営の仕方が預地役所の方針に悖ると問題にされたためのものである。

（二）南町兼子儀右衛門

文化元年（一八〇四）十一月に、預地郷宿（名主宿）が交代したのであり、

…去子十一月九日名主宿御免被仰付、急ニ南町大塚文六方へ引移り、同十八日夜四ツ頃南町兼子儀右衛門二右名主宿

被仰付<sup>(23)</sup>：

とあつて、まず十一月九日に預地御用達を勤める南町大塚文六が一時的に郷宿になったが、同月十八日に同じ南町の兼子儀右衛門が正式に預地郷宿の役に就いたのである。

大山領角田二口村（現三川町）の文化元年九月割（郡中入用）<sup>(24)</sup>の中に、

一、同（永）三拾六文 七日町賄

とあるのに、翌文化二年の九月割の中に、

一、同（永）五百六拾五文七分 南町賄

とあつて、御用で年番名主などが鶴ヶ岡出張の際の宿泊費の支出先からも預地郷宿が七日町柏倉久右衛門から南町兼子儀右衛門に移転したことが確認できる。

兼子儀右衛門家であるが、宝暦三年（一七五三）十一月の「南町軒数御水帳」<sup>(26)</sup>に持主の移動を示す貼紙があり、

一、半軒役 表口三間 裏行式拾五間 儀右衛門

右者清右衛門屋敷買取、宝暦八年寅三月改

と記されていて、宝暦八年三月に半軒役（七十五坪）の屋敷を清右衛門という者より買取ったものであり、他に家屋敷はなかったようであつたので、兼子家はあまり古くからの家ではなかったようである。参考までに、右の「南町軒数御水帳」の表紙に肝煎兼子新兵衛とあるので、あるいは肝煎兼子家の分家といった関係も考えられる。また文化八年（一八一二）九月二十日のこととして、

一、廿日鶴ヶ岡酒屋年番兼子義右衛門・柏倉久右衛門・竹野善藏・菅沼善八・嶋茶、酒屋五軒閉戸、三日目に御免<sup>(27)</sup>

と、何らかの事情から鶴ヶ岡の酒屋年番を勤める酒屋五軒が三日間の閉戸の処分を受けたが、其の中に柏倉久右衛門と共に兼子儀右衛門の名前があり、兼子家がその頃酒屋であつたことが知られる。

つまり、柏倉久右衛門・兼子儀右衛門とも預地郷宿は専業ではなく、二家とも造酒屋の兼業だったのである。

ところで、文化四年四月八日のこととみられるが、兼子儀右衛門方が類火にあったことから、

南町兼子儀右衛門殿類焼二付、三日町中村与市右衛門方へ仮宿被仰付候様申来候<sup>28</sup>

というように、一時の仮宿ということで預地郷宿は三日町中村与市右衛門方に移された。同じ三日町には町年寄役の中村与惣右衛門家があったので、それとの関係が考えられるものの、今のところ明らかでない。

その頃、大山領角田二口村は同領播磨京田村（現鶴岡市）との間で境界争いをしており、内済させるべく大山村惣代名主佐藤善右衛門が一件を取扱っていたことから、和解を催促するために時々名主らが鶴ヶ岡郷宿滞在中の佐藤善右衛門と面談したりしていた。<sup>29</sup>すなわち、

一、文化四年卯五月九日、名主善四郎・長百姓太郎左衛門兩人右御片付御催促之ため…三日町中村宅二而善右衛門殿江得御意候

と、五月九日には仮郷宿の中村与市右衛門方で惣代名主佐藤善右衛門に会ったが、

一、翌閏六月朔日、南町江善四郎罷越、其段善右衛門様へ御断申上候

と、閏六月一日には南町の兼子儀右衛門方で佐藤善右衛門に会っているのが、六月末までには兼子家の再築がなり、預地郷宿は再び兼子儀右衛門に戻ったのである。その建築資金の一部は、預地村々より合力という名目で助力がなされた。<sup>30</sup>

なお、就任年代は不明であるが、兼子儀右衛門も預地郷宿と共に預地御用達を兼ねるようになった。しかも、文政四年（一八二二）の時点で、

御預地御用達、表御用達同格

兼子儀右衛門

同 寛 蔵

と、儀右衛門・寛藏父子で預地御用達を勤めていたのである。<sup>(31)</sup>

天保年間頃の作成とみられる庄内藩の「御給人・御用達分限帳」<sup>(32)</sup>に、

勤中 御預地宿

三人扶持 兼子義右衛門

御預地御口米之内より

と記されており、預地郷宿を勤めている間という期限付きながら、この場合、預地村々より納入される口米のうちから三人扶持が支給されていた。兼子儀右衛門が同じ文政四年中に寸志米百俵を預地役所に献納したのは、右の三人扶持を給与されることになったことに対する御礼であつたからと思われる。

結局、兼子儀右衛門は文化元年（一八〇四）十一月に預地郷宿を命じられて以来、庄内藩預地が免じられる天保十三年（一八四二）七月まで二十八年間も預地郷宿を勤めたのである。

### （三）その他の「郷宿」

寛政二年（一七九〇）九月といえ、柏倉久右衛門が預地郷宿を勤めていた時であるが、松川作左衛門なる者より預地郡中代佐藤善右衛門及び年番名主中に宛て、火災のため金十両の拝借証文が差出されているが、<sup>(33)</sup>文言中に、

御返納之儀者是迄之通り年々御出役名主衆中御宿仕：

とあることから、松川家も名主宿（郷宿）を勤めていたことが知られる。ただ、後述のように兼子儀右衛門に対する郡中よりの合力金に比べて金額を少ないことから、郷宿の補助的な宿泊所を勤めていたことが考えられる。しかし、右の拝借証文以外、松川作左衛門の名前は地方史料に出てこないようである。

また天保十年（一八三九）の「鶴ヶ岡七日町絵図」<sup>(34)</sup>に、

五分役 長人石之助扱五人組頭 藤助

御預所村役人下宿

と見え、預地郷宿のほかに、やはり預地の村役人たちが利用できる「下宿」が置かれていたのである。高二万八千石余、七十三カ村にのぼる預地に公式上は一軒の郷宿しか設けられていなかったとみられるが、一度に利用できる人数も限られることから、補助的な宿泊所として下宿が置かれたのであろう。しかし、管見では、やはり下宿藤助のことは何故か地方史料に出てこないようである。

更に、天保七年（一八三六）二月のこととして、

大山寄会所二而被仰渡候<sup>(35)</sup>

とか、同十二年七月には、「大山役場」という記載があるし、<sup>(36)</sup>また角田二口村の郡中入用として少なくとも同十一年度より年々、鶴ヶ岡の預地郷宿の賄割と共に、「大山賄割」が書上げられ徴収されており、<sup>(37)</sup>大山村にも預地郷宿に準じた宿泊所が設けられていたと考えられる。主に庄内・由利幕領のうち大山領の村々が利用したとみられる。

## 二、郷宿の役割

### （一）本来の役割

郷宿の役割の実際について柏倉久右衛門の場合を中心にみていくことにしたい。

庄内藩の預地郷宿の役割は、久右衛門が命じられた際の覚書にも、<sup>(38)</sup>「御預地諸役人・百姓等之定宿被仰付」とあったように、城下鶴ヶ岡にある預地役所をはじめ庄内藩諸役所に御用などで出向いた庄内・由利幕領の惣代名主、年番名主、名主など村役人、及び一般の農民たちを宿泊させるところの定宿の役割を当然ながら第一にあげることができる。

明和六年（一七六九）に庄内藩預地となつて、しばらくの間預地に三名の惣代名主がいた。大山村名主佐藤善右衛門、千河原村（現余目町）名主金子宗弥、由利郡大砂川村（現秋田県象潟町）名主横山文左衛門の三家が世襲的に勤めた。このうち大砂川村はもちろん、千河原村も鶴ヶ岡までかなり遠かつたのに対し、大山村は比較的近かつたので、三家の中で大山村の惣代名主佐藤善右衛門が代表する形で御用のためしばしば鶴ヶ岡に出向き、郷宿に宿泊したのである。

年々四回程度に分割して割当て、徴収される郡中割などの一部の項目は、各組合村の年番名主に「鶴岡割会所」の名前で通知されることが多いが、これは惣代名主たちがその作業のために寄合つた預地郷宿を指しているものとみられる。

郷宿は惣代名主・年番名主の寄合の場所としても利用された。当時、庄内・由利幕領は十組ほどの組合村（組）から成っていたので、平均すると各組には七、八カ村程度が所属しており、大山三カ村組などを例外として、各組の代表である年番名主には所属の村の名主が一年交代で勤めることを慣行としていた。つまり、当時の預地には三名の惣代名主と十名ほどの年番名主がいたことになる。

寛政三年（一七九一）春弘の分として、大山領友江村（現鶴岡市）では、<sup>(39)</sup>

一、同（錢）五百七十文 御用二付七日町賄代、柏倉行飛脚賃共

と計上して徴収していたし、同六年六月の丸岡領下余目七カ村組でも、<sup>(40)</sup>

一、錢九<sup>(1)</sup>六百六拾五文 度々寄合

大堰御用付鶴ヶ岡賄代共

というように、御用や寄合などのために年番名主や村名主が鶴ヶ岡の預地郷宿に宿泊した際の費用として「鶴ヶ岡賄代」とか「七日町賄代」の名目で郡中割や村入用に計上されていた。

以前、寛延二年（一七四九）に大山領・由利領が庄内藩預地になった際に、やはり預地郷宿は柏倉久右衛門に命じられたが、その時「取次名主宿」と称していたように、<sup>(4)</sup>預地の村役人や農民たちが預地役所に訴願などの用向がある場合、直接預地役所に向くのではなく、まず郷宿に行き、その取次によって預地役所に赴くものであった。

安永三年（一七七四）四月のこととみられるが、播磨京田村では年貢金未納事件が起り、その責任を問われ、名主兩名はじめ村役人が揚り屋入りを命じられたことから、その出牢を求めていることのようにあるが、

一、播磨京田村百姓願之筋二付、大勢柏倉久右衛門宅へ相詰、役所へ申間敷候趣不届<sup>(4)</sup>：

と、村民大勢で郷宿柏倉久右衛門方へ詰めたが預地役所にはその旨を届け出なかったことが不届であるとされたものである。代って就任した新しい名主の方より未納金とも皆済することを誓約したこともあり、

右三役人揚屋御免被成下置度之旨御佐御願奉申上候処、…町宿預二被仰付候<sup>(4)</sup>：

と、出牢のうえ郷宿預りを命じられたのである。もともと郷宿には軽い処罰として「宿預」を行う役割が課されていた。処罰者などを一定期間郷宿で預るものである。<sup>(4)</sup>右の播磨京田村の場合も、揚屋入りの期間を減じられ、代って郷宿預りにしてもらったのである。

ただ、明和七年（一七七〇）六月とみられるが、丸岡領の鷺畑、上中野目、平足の三カ村（いずれも現藤島町）の年貢未進事件では、

当皆済金納、鷺畑村・上中野目村・平足村上納及未進候二付、為百姓惣代名主・組頭・長百姓共手錠代屋預り申付候<sup>(4)</sup>というように、村役人たちが手鎖のうえ代屋預りとなったのである。つまり、預地郷宿ではなく庄内藩領の郷宿にあたる代屋に預けられたことになる。おそらく柏倉久右衛門が預地郷宿を命じられてまだ日が浅かったため、郷宿預りの処

罰者を受入れるような施設などが出来ていなかったことによると思われる。

預地の村役人や農民が預地役所に訴願をする場合などに、文書作成に慣れていないことから、『徳川幕府県治要略』の記すように、<sup>(46)</sup>郷宿が代書を行うなどの手助けを行うのも通例のことであった。郷宿は書類作成に熟達していたからである。代筆料なども受取る場合もあったはずである。

天明二年（一七八二）八月に、庄内藩領黒森村（現酒田市）付近の赤川に新土手を設置することで争論が起ったが内済となったことから、大山領京田組村々は預地役所に請書を提出したが、その際、

土門兵助加筆、七日町柏倉久右衛門殿執筆、名主東蔵右御請書御役所江屯通差上…<sup>(47)</sup>

というように、請書は、まず郷宿の柏倉久右衛門が執筆し、次いで京田組野興屋村（現鶴岡市）名主土門兵助が加筆して、同組角田二口村（現三川町）名主佐藤東蔵が預地役所に提出したのであった。

寛政八年（一七九六）十二月とみられるが、預地役所の指示では、「諸書物相願候もの江手擬之義別段相立可申事」<sup>(48)</sup>と、郷宿が代書を行う場合に手数料を別に受取るようにとしていた。それまでも受取ったりしていたであろうから、宿泊料として一括しないようにということであったかとも思われる。

以上、預地の村役人・農民たちの定宿であると共に、預地役所への取次ぎ、同役所などに提出する書類の代書、軽い処罰者を預る郷宿預り、これらが預地郷宿の本来の仕事であったといえる。

## （二）「中間支配」的な役割

次に、本来の仕事を一歩踏み出して、預地郷宿が、預地役所の下請的な業務や惣代名主に準じた役割を果たしていたことにふれてみる。安永八年（一七七九）五月のこと、

覚<sup>(9)</sup>

御預地三郡村々為五穀成就・安全、当月廿六日より同廿八日迄金峯山ニおゐて二夜三日御祈祷致候二付、信心族男女ニ限らず致参詣不苦之旨、村々江其元より御申通可被成候 以上

亥五月

川端役所

当番印

右之通被仰達候間、村々信心之方者参詣致候様可被申触、尤年番名主中者廿八日相揃参詣いたし候様可被仰渡候旨御内々拙者迄被仰付候間、其心得二而御詰可被成候、以上

亥五月

柏倉久右衛門印

深川村

名主傳右衛門殿

と、預地村々の豊作などを祈願するために、五月二十六日から二十八日まで金峰山（現鶴岡市）で祈祷を行うので、希望者がいれば参加してもよいし、年番名主は二十八日に揃って参拝するようにとの預地役所の指示を受けて、郷宿柏倉久右衛門が丸岡領下余目七カ村組の年番名主に通知したのである。他の年番名主たちにも同様に通知したことであろう。あるいは廻状として出されたものか。

また、寛政四年（一七九二）二月に庄内藩主酒井忠徳の生母為姫が病死したことから、預地の年番名主たちにはやはり柏倉久右衛門の方から、

…殿様御母公様御病死被遊候二付、柏倉久右衛門殿より慎ミ被仰付候間、鳴もの并火の元用心等専一二可被成候…<sup>(10)</sup>  
と、「慎ミ」のことを通知されたのを受けて、年番名主が組方村々に鳴物の停止や火の用心等を指示したのであった。

以上の二件は預地役所の指示のもとに廻状などを順達させたのである。あるいは預地御用達としての仕事であったか

とも考えられる。

天明二年（一七八二）正月には、三月頃より始まる預地の年貢米の廻米に関連して、柏倉久右衛門の名前で下余目組及び廿六木村（現余目町）あてに次のような廻状が順達された。他の組にも同様に順達されたことであろう。

覚<sup>㊟</sup>

当御廻米初中札納御役人名前左之通相認、当二月十五日限り差出候様被仰付候間、村々江無間違御申達可被成候、尤此廻状早々順達可被成候 以上

正月廿一日

柏倉久右衛門印

名主嘉兵衛（殿）

廿六木

同 幸左衛門（殿）

江戸や大坂に廻米される年貢米粃の俵に付けられる中札に納入者の名前などを記入して二月十五日まで提出することを年番名主等に指示したものであるが、本来であれば惣代名主の職務というべき廻米に関した指示を郷宿が行っていることが注目される。明らかに郷宿本来の仕事の範囲から踏み出している。

翌天明三年七月には、稲の作柄に関連して大山村惣代名主佐藤善右衛門と柏倉久右衛門が連名で年番名主に対して、提出する願書に印形が必要として次のような通知をしていた。

覚<sup>㊟</sup>

当作毛ニ付願書提出候ニ付、印形入用ニ候間、明十八日朝飯後無間違可遣候 以上

七月十七日

佐藤善右衛門

柏倉久右衛門

## 名主傳右衛門殿

天明三年は庄内では天明飢饉の中でもっとも大凶作の年であったが、作柄の状況につき一応の見通しのついた時点で、惣代名主らは預地の年番名主の連名で破免減免の願書を預地役所に提出することにし、そのための印形が必要であることから右のような通知となったものと推測されるが、預地全体の年貢の破免・減免の歎願について惣代名主と共に郷宿が主導的立場にあったのである。

寛政七年（一七九五）十二月に、急に預地の米納村々は年貢米の一部として粃を納入するように命じられたことから、角田二口村では、

凶作ニ而粃無之段年番江申出候所、居村有合斗り計り出候様：七俵斗候間、專助柏倉江罷越、聞合セル<sup>(53)</sup>

というように、まず凶作で村内に保有されている粃がほとんどないことを京田組年番名主まで申出たところ、村方に有る分だけ納入するようにと指示されたが、保有粃は七俵だけなので、それでよいかどうかを名主専助がわざわざ郷宿柏倉久右衛門まで出向き、聞合せたとする。この件を惣代名主ではなく郷宿に聞合せたということから、大山村居住の惣代名主よりも鶴ヶ岡郷宿の方が実際の事情に通じており、また権限を有していたことを窺わせる。

安永三年（一七七四）四月に、前述のように大山領播磨京田村に年貢金未納事件が起こり、新任の名主たちが未納分を含めて皆済することを誓約したが、それについては、預地役人の手控に、

一、播磨京田村名主罷出、上納金四十七両余取立難相成旨申出候、不輕義甚不埒千万二候得共、表立処候而ハ不相済事故、評儀之上柏倉久右衛門并外二名主兩人：拙者とも如何とも取計、上納可為仕候旨願出、右之三人之者へ為取計、右不足金も為取計：

とあり、同年三、四両月の年貢金四十七両余が取立できない旨の届出がされたが、重大事ながら表立っては具合が悪いことであるからと、預地役所では郷宿柏倉久右衛門と新任名主（二名）の三人に取計いを命じたというのである。結局、

新任名主の一人和右衛門が才覚し上納したので、今回の柏倉久右衛門は善後策を協議しただけで、直接金子を才覚するなどのことはなかったようである。

ところが、寛政十年（一七九八）五月に余目領九カ村組（現余目町）より年貢金の月延べ願いがあつたことについては、一、寛政十年五月余目九ヶ村金納月延之次第申出候而、表向ニハ不及御沙汰候得共、取計之次第有之、江戸表之障なく此形例ニも不成様役所ニ而もメリニ相成候様ニ取計候事、久右衛門才覚候而相済候事<sup>(55)</sup>

というように、預地役所としては表向きは許可できないことながら、何とか幕府勘定所に報告することなく、かつ預地においても先例とならないような形で許可することにしたとして、結局久右衛門に才覚を命じて、調達させた金子で一時的に取繕つたというのである。久右衛門とは郷宿柏倉久右衛門のことであろう。立替えた金子は間もなく返済されたことであろうが、右のような柏倉久右衛門の立替えは他にあつたことであろうし、このような立替えは郷宿の仕事の一部とみるよりも、兼務している預地御用達としての仕事に関係していたとみる方がよいであろうか。

なお、例えば寛政八年（一七九六）十二月に次のように夫食貸付年賦金の受取書が丸岡領下余目七カ村組年番名主あてに出されている。本来、預地役所で貸付けたはずであるのに、受取人は柏倉久右衛門と惣代名主佐藤善右衛門になつており、夫食貸付も実際には預地郷宿兼御用達の柏倉久右衛門らが行つていたものであると考えられる。

覚<sup>(57)</sup>

一、金四両三分・五匁

右者夫食貸付年賦金槩受取申候 以上

辰十二月廿日 柏倉久右衛門

佐藤善右衛門

下余目七ヶ村年番

名主茂左衛門（殿）

さて、天明八年（一七八八）八月に幕府巡見使が出羽国幕領に下向してきたが、先に巡見使の廻村が行われた村山幕領での廻村の様子を聞かせるために出張した大山領の土門兵助・佐藤東蔵両名主より郷宿柏倉久右衛門及び惣代名主佐藤善右衛門・金子清兵衛の三人あてに書状が到来し、巡見使の庄内下向の日程らが知らされた。<sup>(58)</sup> 預地役所より指示があつてのことであろうが、預地の惣代名主や重立名主らと共に郷宿柏倉久右衛門も幕府巡見使を迎える準備等に当たつたのである。

寛政四年（一七九二）秋に、預地役所では預地村々の困窮農民の調査を行い、極難渋者に対し米代錢を与えたが、調査書は各村々の名主より郷宿柏倉久右衛門あてに提出された。<sup>(59)</sup> しかも、米代錢の受取書も次のように久右衛門らに差出された。先の夫食貸付年賦金などと同じように、このような金銭の出入も郷宿・御用達らが中心に行つていたものと思われる。

覚<sup>(60)</sup>

一、米壺石四升

此代錢四貫三百六拾八文 但米壺表ニ付式メ百文かへ、両替五貫八百文

右者極窮もの江被下米代金書面之通謹請取申候処実正ニ御座候 以上

子九月十一日 千河原村

名主清兵衛<sup>(61)</sup>

柏倉久右衛門殿

名主東蔵殿

なお、差出人の千河原村名主清兵衛は惣代名主金子宗弥家の当主であるが、この場合は丸岡領上余目八カ村組の定年

番名主の立場であろう。それでも、この困窮農民の調査や米代銭の支給の件では、惣代名主はあまり関与せず、郷宿兼御用達の柏倉久右衛門が主要な役割を果していたのである。

郷宿は村々の争論などにも取扱人となって調停・内済に努めることもしばしばあった。

大山川の流路に沿ってではなく、それにはほぼ直角となる形で設置されていた横土手の存廢をめぐる大山領尾花村（現三川町）と隣村の庄内藩領成田新村（同町）の間で長年にわたり争論があった。横土手の存在により上手にあたる尾花村には洪水の度に長期に及んで滞水することから、その撤廢を求めたのに対し、撤廢されれば洪水が直接成田新村を襲うことになるからである。寛政元年（一七八九）には庄内藩領大庄屋、大山領京田組年番名主と共に柏倉久右衛門が取扱人を命じられたし、寛政九年にも同様であった。<sup>(61)</sup>利害の対立が激しく、容易には内済に至らなかった。

享和三年（一八〇三）に起った大山領の角田二口・播磨京田両村の境論では、取扱人となった京田組年番名主と同組新興屋村（現鶴岡市）名主の両名の取扱い方が良くないとして惣代名主佐藤善右衛門と柏倉久右衛門に「以之外しか（叱られ）たのであり、前述のように間もなく佐藤善右衛門が調停に当たったのである。<sup>(62)</sup>

寛政八年十一月に、酒田本間家と由利郡大砂川村名主（惣代名主兼務）の文左衛門（横山家）の間で、「田地出入一件」があつて、佐藤善右衛門、柏倉久右衛門が取扱を命じられて、由利郡に出張したのである。<sup>(63)</sup>

寛政十一年（一七九九）のこと、

一、余目・増川組村々百姓共心得違、無謂願を可申立と既ニ御城下近参ニ付、柏倉久右衛門并大山名主善右衛門罷出、利害申含、為引取事済候……<sup>(64)</sup>

というように、預地のうち余目・増川両地区の百姓たちが、「無謂願」というから年貢金の減額願いなどであろうが、<sup>(65)</sup>城下近くまで押し出してきたので、急ぎ駆付けた柏倉久右衛門と大山村惣代名主佐藤善右衛門両人の説得があつた結果、百姓たちが受入れて引揚げたというのである。佐藤善右衛門はちょうど郷宿に滞在中だったのかと思われる。

預地村々の農民たちは日頃から何かと郷宿や惣代名主と接触があり、何よりも御用等にかかわり色々世話に預っていたことから、信頼する気持ちがあり、その説得に応じたものであろう。

以上、柏倉久右衛門の代に限定して、預地郷宿の役割や仕事を具体的な史料を紹介する形で述べてきた。郷宿本来の仕事に従事するにとどまらず、預地役所の補助的仕事や惣代名主に準じた役割を果たして、預地役所のある城下鶴ヶ岡住居という地の利もあって、次第に惣代名主よりも事情に通じ、より大きな権限を有するようになっていたようである。近世後期の預地において、惣代名主をしのぎ、「中間支配」の枢要な位置を占めるようになっていた。その場合、郷宿と御用達の兼務が重要であったと思われる。

前述のように文化元年（一八〇四）十一月に預地郷宿が交代したが、その際、預地役所では新任の兼子儀右衛門に対し、郷宿（名主宿）の勤め方について申渡したが、その文言に、

…兼子儀右衛門ニ右名主宿被仰付、是迄通りニ替り、御役所へ案内斗ニ而、御用道ニ口入等いたし不申…<sup>66</sup>

とあり、預地支配のことに関与せず、預地役所への取次など郷宿本来の仕事だけをするようにと指示しているが、それまでの郷宿柏倉久右衛門は、預地役所からみても預地支配のことに深く関与しすぎたことを物語っている。しかし、それも柏倉久右衛門が進んで行ったのではなく、預地役所の命令などに忠実だっただけであろう。右のように申し渡された兼子儀右衛門も預地支配のことに深く関与するようになるのに多くの日数を必要としなかったのである。

### 三、経済面からみた郷宿

大山領角田二口村の前名主佐藤東藏貞教の編集になる「隅田領袖」<sup>67</sup>に、当時預地村々が郷宿である柏倉久右衛門に対

する歳暮、年始について次のように記している。

一、金貳両 歳暮 御用達名主宿柏倉久右衛門

一、同四両 年始 同人

一、同貳分位 御内義

一、同断 御子息

歳暮として金二両、年始として本人に金四両、内義と子息に金二分位ずつ、会わせて金七両ほどになる。庄内・由利幕領全体としては少々少ないようなので、京田組の分であろう。

丸岡領下余目七カ村組の場合、例え<sup>(68)</sup>ば安永六年（一七七七）十二月のこととして、

一、同（錢）拾壹貫八百文 柏倉久右衛門

#### 此金貳両 世話料

とあり、その後も年々大体八月～十一月の郡中割の中で、金二両の世話料が計上されており、その分を錢で村々に割当て徴収している。その点から、「隅田領袖」にあった歳暮（金二両）は本来世話料ということであったとみられる。

右の二組の例からであるが、庄内・由利幕領は組ごとに金二両ずつの世話料を柏倉久右衛門に納入していたとみられる。当時、十組ほどの組合村があったので、世話料は金二十両ほどにのぼったとみられる。

京田組では世話料である歳暮のほかに、年始も納入していたが、下余目七カ村の方には計上されていないようであり、この分は組によって納入したり、しなかったように任意のものであったとみられる。

ところが、文化元年（一八〇四）十一月に、預地郷宿が七日町柏倉久右衛門から南町兼子儀右衛門に交代したが、世話料（歳暮）などについては、

一、南町二相成候而より年始・歳暮・給金之義一切無之、從御役所申受間敷旨被仰渡候由承候<sup>(69)</sup>

というように、兼子儀右衛門では預地役所よりの指示で、預地村々より年始、歳暮、給金など一切を受取らなかつたとする。事実とすれば、預地村々にとって負担が軽減されたことになる。もともと、今度の郷宿の交代には郡中入用や村入用等の削減の方針も関係があったとみられる。

ただ、角田二口村の郡中入用・村入用について、例えば、文化五年（一八〇八）三月の場合、<sup>(7)</sup>

一、同（永）百三文四分      南町面割

一、銭九拾文      南町賄三ツ

という記載があり、また同年閏六月の場合、<sup>(7)</sup>

一、同（永）百三拾四文八分      面割

一、同百九拾六文六分      南町賄代

とある。「南町賄」は、角田二口村の名主など村役人や京田組年番名主らが御用で預地郷宿の南町兼子儀右衛門に宿泊した時の賄代である。このような賄代は柏倉久右衛門の時にも取立てられていた。それに対して、「南町面割」とは何であろうか。郷宿が柏倉久右衛門の時は賦課がなく、郷宿が兼子方に移転してから徴収されるようになったとみられる。もちろん、角田二口村や京田組ばかりでなく、他の組村でも徴収された。<sup>(7)</sup>これは南町郷宿に要する費用を庄内・由利幕領村々が均等に負担するものであったとみられる。先の角田二口村の場合、三月と閏六月に二度で合せて永二三八文二分となる。年に二度の取立とすれば、永二三八文二分、年に四度とすれば四七六文分ほどとみなせる。当時、庄内・由利幕領は八十二カ村であったので、預地全体では前者とすれば、金十九兩二步余、後者とすれば三十九兩ほどになる。つまり、預地役所の申渡で、預地郷宿に対する年始、歳暮らは表立っては廃止となったが、実際には代って「南町面割」としてほぼ相等する金銭が徴収され受取っていたと考えられる。

次に郷宿を利用したときの料金についてみてみよう。それについて『郷政録』<sup>(75)</sup>に、

一、兼子義右衛門方ニ而者、公事出入之無差別百五十文之外、夜具代者勿論別段之掛り物無御座候、七日町久右衛門宿之節者年番并村々之当夜具貳拾人前余郡中より用意致し置申候…

と記して、預地郷宿では柏倉久右衛門の時も兼子儀右衛門の時も一泊錢一五〇文を徴収したのである。もともと、寛政改革の時の預地役人の指示では、「朝夕一賄六拾文宛、昼三拾文」<sup>(74)</sup>という内訳であり、すべて賄代からなっていた。そして、柏倉の場合、後述するような理由であろうが、夜具は預地の方で調達したとするのであり、一回ごとに夜具代を徴収したとは思えない。それについて兼子の方はそのような費用は一切掛らなかつたとする。その夜具の分を考慮しなければ、預地郷宿の宿泊代は錢二五〇文と変わらなかつたのである。

参考までに、庄内藩領の代屋の場合、<sup>(75)</sup>

一、代屋ニ而者公事出入ニ付相詰候者、賄代貳百文、外夜具代として四拾文、其外灯油・行灯張替等まで指出候事

と、公事出入などで代屋に滞在した場合、賄代二百文に、夜具代四十文、ほかに灯油代なども取立てたとする。一日錢二五〇文程度とみられ、預地郷宿のうち兼子家の場合と比べると、料金は六、七割ほど高くなっていたとみられる。

それに関連して、文化十二年（一八一五）十二月に預地の私領同様取扱いが許されたことに伴い、翌十三年九月に預地役所としての川端役所が廃止されたことから、公事出入などが生じた場合、川端役所での審理から庄内藩会所での審理となつたとみられ、それに伴い訴訟関係者のうち預地の者も郷宿宿泊ではなく、庄内藩領の代屋滞在とされることを心配して、預地の惣代名主が連名で歎願をしたが、<sup>(76)</sup>その中で次のように記していた。

…右之通之振合ニ御座候得者、代屋詰被仰付候而者甚不益之筋多有之、且末々ニ相成候而者謝礼音信等も自ら出来可申、左候得者畳表替等者勿論、諸繕合力可致風情ニ相成、臨時之入用数多可有之様被相考候…

代屋は料金が高いうえ、今後預地の者がしばしば利用することになれば、代屋に対し謝礼や音物を恒常化すること

になろうし、代屋の修理などに合力を求められて、臨時の出費も多くなるとして、公事出入に際しても代屋詰めでなく、郷宿詰めにしてほしいとするものであったが、聞届けられなかったのである。<sup>77)</sup>

なお、前述のように寛政八年十二月頃に、預地役所では郷宿が文書類の代書を行う場合にきちんと手数料を受取るように指示していた。実施されたとすればこれも郷宿の収入となるはずである。<sup>78)</sup>

江戸時代の鶴ヶ岡ではしばしば大火が起ったので、時に郷宿にも類火が及ぶこともあった。現に、柏倉久右衛門の時にも、兼子儀右衛門の時にも類焼している。例えば、文化四年（一八〇七）四月八日のこととみられるが、

南町兼子儀右衛門殿類焼二付、三日町中村与市右衛門方へ仮宿被仰付候様申来候<sup>79)</sup>

とあるように、兼子家が類焼したので、一時三日町中村与市右衛門が仮宿となったとする。もちろん、兼子家も直ちに再建することになった。その際、以前の柏倉家の再建時を前例にして、預地村々は合力金を提供したのである。

#### 南町類焼合力<sup>80)</sup>

一、文化四年卯四月八日南町兼子儀右衛門類焼二付、郡中江無尽之御無心御座候所ニ、出し切ニ致度よし組々ニ而申候由、尤先年御預地御用達并名主宿柏倉久右衛門類焼之節、合力金五拾両・其外夜着調代金拾両、都合六拾両合力仕候間、其通ニ而可然候段沙汰仕候得共、惣年番衆百両御引受被成候故、其通ニ相成候：

兼子儀右衛門の方より預地村々に対し、百両無尽を發起してくれるようにとの無心があったようであるが、預地組々の意向では無尽の形ではなく、一時金として提供したいということであった。以前、柏倉久右衛門の時の火災では、やはり預地村々が合力金五十両、夜具調達代金十両、合せて金六十両を一時金として提供した事例もあるので、今回も村々はそのようにしたいと考えていたのであった。ところが、おそらく預地役人よりの口添えがあつてのことであろうが、年番名主たちは金百両ということで引受けたということであり、結局金百両を一時金として提供したというのである。物価などを考慮してのことであろうが、金四十両の増額となった。預地よりの合力金もあつて、兼子家は六月中には再

建されたようである。<sup>(81)</sup>

右の合力金は預地組々に割当て出金させたのであり、大山領京田組の場合、

覚<sup>(82)</sup>

一、金拾五両三分・(銀) 拾四匁六分壹厘

右者郡中宿兼子儀右衛門殿類焼二付百両無尽御頼二付、組々割賦仕候所如斯御座候 以上

文化四年

鶴岡割会所

卯五月

年番土門九右衛門殿

此分両度ニ出シ申候

と、京田組は金十五両三步余の負担であり、同組では二度で出金したようである。村々よりも二度徴収したのであろう。もつとも、余目領余目九カ村組の西小野方村では、同年(文化四年)九月のこととして、<sup>(83)</sup>

兼子無ぢん(尽) 卯九月

とあり、「兼子無尽」を發起し、何度かに分割して徴集しようとしたようである。ただ丸岡領下余目七カ村組でも、  
覚<sup>(84)</sup>

一、金五両壹歩四匁六分六厘

兼子殿無尽

此割高目安三五々

一、永壹ノ百七拾八文八分

高田麦村

(六カ村―省略)

ノ永五貫貳百九拾七文

内永貳ノ六百四拾八文三分 当六月取立

残り貳貫六百四拾八文三分 来ル九月取立分

と、負担金五両一步余につき「兼子殿無尽」としているが、六月と九月の二度に村々より高割で取立てており、「無尽」とはあつても、実際には無尽が発起されていないようである。参考までに天保五年（一八三四）の大山村安良町組の請払帳に同九月二十六日のこととして、<sup>(85)</sup>

一、金九拾匁六分

兼子無尽三番

とあり、兼子無尽が行われているが、三番とあるので、極く近年の発起とみられ、火災の合力金とは直接関係なく、別に兼子家が経済的事情などから発起した無尽のこととみられる。なお、兼子家が類焼した時とか、柏倉久右衛門も同じ文化四年に類焼して、同十月に新宅完成したので、預地惣酒屋で祝儀金三両を提供した。<sup>(86)</sup> 柏倉家で長らく預地の酒銭取立に関する惣請免を行っていたからである。

以上から、預地から世話料などの提供があつたとはいえ、預地郷宿は鶴ヶ岡の富裕な町人が兼業として営んだものであり、預地が丸抱えしているのではなかった。そこで宿泊代（賄料）も低い値段に押えることができたのであろう。それでも、火災などに際しては、その再建のため預地村々よりかなりまとまった金子の提供を受けたのである。

## 結びに代えて

近世後期、明和六年（一七六九）以降の庄内藩預地支配のもとで、城下鶴ヶ岡に置かれた預地郷宿について、郷宿を勤めた町人やその役割について検討したものである。

本稿で述べた点を簡単に列挙して結びに代えたい。

第一に、預地郷宿は文化元年（一八〇四）までは七日町柏倉久右衛門が、同年以後は南町兼子儀右衛門が勤めたが、両家とも造酒業を本業としていた。郷宿は兼業として行われたのである。なお、下宿のような宿泊所も置かれていたのである。

第二に、郷宿は本来的な業務としては、村役人や農民の定宿であると共に、預地役所などへの取次ぎ、文書類の代筆、軽罪者の宿預り、などを行った。また、惣代名主・年番名主の寄合所としても利用された。

第三に、預地役所に近く住居する郷宿の方が、在方に住居する惣代名主よりも、何かと手近く便利であったため、預地役所の下請けとして郷宿が事実上惣代名主と同じような形で預地支配の一部を担うようになったのであり、しばしば村々の争論の取扱いも行った。

第四に、郷宿は預地御用達を兼ねたこともあり、郡中割の割当てなどにとどまらず、年貢金の徴収、夫食金の貸付・年賦返済、年貢未納金の才覚なども実務として担当したのである。

第五に、預地組々は柏倉久右衛門に対し年々歳暮、年始などを提供したが、庄内藩の郡中割・村入用の削減の方針により中止されたとされるが、実際には兼子儀右衛門の時に「南町面割」と名称のもとに存続していたのである。賄代は一泊銭一五〇文であり、庄内藩領の代屋に比べると割安であった。その代わりといえようか、郷宿が火災などの災難を蒙った際には、預地よりまとまった合力金を提供するのを慣例とした。

大体、以上である。

# 註

(1) 原滋「天領支配と郷宿」(『信濃』第二十八号第三号)、岩城卓二「近世領主支配と村役人・郷宿・下級役人」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会的権力』所収)など。

(2) 庄内藩領の場合は代屋と称した。

(3) 『余目町史資料』第二号一五八頁

(4) 田中政徳『郷政録』(鶴岡市郷土資料館)

(5) 「御請申上候一札之事」(宝暦十二年『御用願書扣』右同館二口文書)

(6) 鶴岡市史編纂会編『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』上巻一七頁

(7) 明和五年「御用万留置帳」(象潟町教育委員会『象潟の文化』平成六年度)

(8) 山口稔「忠広と片鎌の槍」(『荘内文学』第六号)

(9) 山形県史資料篇五『雞肋編』上巻四八八頁

(10) 『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』上巻、柏倉家は文化元年頃には「御扶持帶刀、大庄屋格」となっていた(『大泉叢誌』卷之八十三)。

(11) 「正田記」(酒田市立光丘文庫松平武右衛門文書)

(12) 安藤博『徳川幕府県治要略』九九頁

(13) 『郷政録』

(14) 例えば新潟など(『江戸学事典』一六七頁)、なお酒田の上林七郎右衛門も町検断であった(小寺信正『荘内物語』

(15)、(16) 『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』下巻七七頁

- (17) 『鶴岡市史』上巻五四八頁
- (18) 『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』下巻七七頁
- (19) 鶴岡市郷土資料館文書
- (20)、(21) 寛政八年九月ヨリ「御用留」(余目町南野文書)
- (22) 『大泉叢誌』卷之八十三
- (23) 寛政八年九月ヨリ「御用留」(余目町南野文書)
- (24)、(25) 寛政六年正月ヨリ「御用留」(二口文書)
- (26) 宇治家文書(鶴岡市郷土資料館)
- (27) 「文化八年辛未記」(二口文書)
- (28) 寛政六年ヨリ「御用留」(二口文書)
- (29)、(30) 『隅田領袖』(二口文書)、『三川町史資料集』第四集一五三・一五四頁
- (31) 『鶴岡市史』上巻五五〇頁
- (32) 鶴岡市坂野下・菅原家文書
- (33) 『年番箆笥扣』(鶴岡市平田・五十嵐家文書)
- (34) 鶴岡市史編纂会『図録庄内の歴史と文化』所収
- (35) 天保五年四月ヨリ「御用留日記」(鶴岡市郷土資料館湯野浜文書)
- (36) 天保四年十月ヨリ「御用留」(二口文書)
- (37) 「上納金四ヶ領色々控帳」(『三川町史資料集』第二集一三六頁)
- (38) 『鶴ヶ岡大庄屋・宇治家文書』上巻一七頁

- (39) 寛政三年亥正月ヨリ「友江村諸入用請払帳」(鶴岡市友江文書)
- (40) 「丸岡領下余目組七箇村四ヶ領諸色割賦帳」(酒田市局・今井家文書、光丘文庫)
- (41) 『郷政録』
- (42) 「播磨京田村百姓取計候御褒賞金ニ付」(二口文書)
- (43) 「御請奉申上候御書」(二口文書)
- (44) 原滋「天領支配と郷宿」
- (45) 明和八年「差上申御請書之事」(余目町中堀野文書)
- (46) 『徳川幕府県治要略』三九三頁
- (47) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第四集四六頁
- (48) 『年番筆筭扣』
- (49) 安永七年八月ヨリ「御用留帳」(酒田市局・池田家文書)
- (50) 寛政三年八月ヨリ「御用記」(右同文書)
- (51) 天明元年八月ヨリ「御用留帳」(右同文書)
- (52) 天明二年八月ヨリ「御用留帳」(右同文書)
- (53) 天明七年八月ヨリ「御用留」(二口文書)
- (54) 『御預地向手扣』(元余目町史専門委員・故高橋正雄氏所有文書)
- (55) 安永九年十一月「播磨京田村一件取方書物」(鶴岡市播磨・斎藤家文書、鶴岡市郷土資料館)
- (56) 『御預地向手扣』
- (57) 寛政八年八月ヨリ「御用留帳」(酒田市局・今井家文書)

- (58) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第一集一四頁
- (59)、(60) 二口文書
- (61) 『郷土成田新田のあゆみ』四六頁
- (62) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第四集二五頁
- (63) 『類例記』(鶴岡市郷土資料館伊藤家文書)
- (64) 『御預地向手扣』
- (65) 寛政十一年五月に余目郷百姓が年貢金が高いなどの理由から庄内藩主に強訴しようとした事件も起こっている  
 (『庄内旧事記』、故佐藤東一編『余目町史編集資料』所収)。一連の事件とも考えられる。
- (66) 寛政八年九月ヨリ「御用留」(南野文書)
- (67) 二口文書、『三川町史資料集』第四集にも収録されている。
- (68) 安永六年八月ヨリ「御用留帳」(酒田市局・池田家文書)
- (69) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第四集一四八頁
- (70)、(71) 寛政六年正月ヨリ「御用留帳」(二口文書)
- (72) 文政十二年頃、大山郷八カ村組枋屋村で賄料と共に「面割」が徴収されていた(大山・羽根田家文書、鶴岡市郷土資料館)。
- (73) 『郷政録』
- (74) 寛政八年九月ヨリ「御用留」(南野文書)
- (75) 〱(77) 『郷政録』
- (78) 『年番箆筒扣』

- (79) 寛政六年ヨリ「御用留」(二口文書)
- (80) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第四集一五三・一五四頁
- (81) 『隅田領袖』、『三川町史資料集』第四集五一頁
- (82) 『年番筆筭扣』
- (83) 文化二年八月ヨリ「諸御用留帳」(余目町西小野方文書)
- (84) 文化四年卯六月「丸岡領下七ヶ村郡中四ヶ領割元帳」(酒田市局・今井家文書)
- (85) 天保五年十二月「大山安良町組・砂押村金銭米札上納四季小役請払帳」(大山・羽根田家文書)
- (86) 享和二年ヨリ「酒方御用記」(『三川町史資料集』第十集)